
紫煙に消えた

ルナ・E・ストーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紫煙に消えた

【Nコード】

N1006I

【作者名】

ルナ・E・ストーン

【あらすじ】

これまで接点の無かった世界での二人の出会い。急接近していく恋の先には意外な結末が……

27歳の夏、ここ何年かの中では然程暑くは感じなかった。

その夏あたしには恋人が居た。

正確に言つとその年の冬と春の間で、どちらの季節に属しているのかとても曖昧な、冷たいのにどこかジリジリとした日差しが強い時期から続いていた恋人が居たのだ。

彼は瞬という名前で、年はあたしの一つ下の26歳で、職業はホストをしている。

出逢ったのは勿論彼の勤める店だったけど、最初に接客してくれたのが彼だったわけではない。

あれは友達とホストクラブに初めて行った夜の事。

会計を済ませて店を出て僅かに歩いた頃に、今来た道の方から覚えの無い声があたしの名前を呼んだ。

もしかしたら忘れ物でもしたのかも。

そんな思いでゆっくりと振り返る。

息一つ乱す事無く振り返ったそこに立つ彼がどうやらあたしの名前を呼んだみたいで、ホストクラブなど誘われて興味本位で来た今回が初めてな上、彼の服装、身のこなしから察するに90%ついさっきまで飲んでいた店の男の子だと言うのは紛れもない。

「何か忘れ物でもありました？」

彼に向き直るなり間髪入れずに聞いた。

「いや、忘れ物じゃないんだけどね。」

では、なんなんだろう。

会計の金額だつて間違つてないはずだけど………。

「ああ、でも。忘れ物といえば忘れ物かな。」

自信に溢れたような彼がにこりと笑いながら、焦らすような物言いをする。

結構背のある彼は少し浅黒く健康的に日焼けしていて、ちらりと見えた白い歯が一層その色を引き立たせている。

ホストクラブで働くだけの事はある、などと思いながらも内心早くこの場から立ち去りたい気持ちが勝っていた。

何故ならあたしの右肩にははしやぎすぎて酔いつぶれかけてる友達の全体重が掛かっていて、当の本人は持たれて歩くのが精一杯。

意識を飛ばしてはいないものの、それももう時間の問題だと思う。

いい男だけどもどろっこしい言い方は好きじゃないし、この状況下

では尚更回りくどく思えてならない。

あたしが何も答えずにいると彼がまた口を開いた。

「君の連絡先、教えてもらおうと思ってさ。」

「え？あたしの？なんで？話してもいないのに。」

「むしろ話してないからじゃん？てか連絡先聞くのに理由ってそう
必要ないでしょ。」

まるで俺の何が間違ってるの、とでも言いたそうな顔で彼は答える
や否やもう既に携帯を手にとっている。

あたしの方が何か変な事言ったのかな………。

そんな事さえ考えてしまった。

「ほら、早く携帯出して。」

「え？あ……はい。」

言われるがままにあたしは空いている左手でバッグから携帯を出そ
うとした。

が、さすがに片手で一連の流れをこなすには少々困難である。

「ごめん。片手じゃきついよね。俺が取っても良ければ取るよ。」

「あ・・・じゃお願いしま」

そう言い掛けてバッグを彼に渡そうとしたのだけど。

すつと彼はあたしの横に立ち、肩から少し無造作に掛けていたバッグの中を覗き込んだ。

「見るよ？どの辺にある？」

「多分ポケットの中に・・・」

たどたどしくあたしは携帯の在り処を説明する。

彼との距離ほんの数センチ。

別にイケメンに目がないとか、彼が好みだとかそんな事はないけど、何だか心拍数が跳ね上がった。

携帯を取り出す時にじっとこっちを見るのでとても目を合わせる事が出来ない。

あまりの近さに彼から匂う香水のせいで一度冷めた酔いが舞い戻った気がした。

「うん、あった。じゃ登録しとくね。」

あたしの携帯を慣れた手つきで操作して連絡先を登録すると、彼は今度は手だけを伸ばしてバッグの元あった場所に携帯をしまってくれた。

「ごめんね、友達抱えてるのに引き止めちゃって。気をつけて帰っ

てね。」

「いえいえ。ありがとう。じゃあ・・・。」

また、とも言えず少し素っ気無い感じにあたしはそこを立ち去った。
何しろ右肩が重い。

繁華街も元々特別好きじゃないし。
そこからすぐタクシーを捕まえて友達と、すぐとけてしまいそうな
魔法のような空気を連れて帰宅した。

翌日朝起きるとメールが届いていた。

昨日の彼からで、内容はいたってシンプルな一行。

「おやすみ、またね。って・・・・・・・・・・・・・・・・。」

友達が隣にいるのも忘れて思わず口に出してしまう。

よって帰り際の一連の流れを説明する事に。
すると常連である彼女から色々な情報を得た。

昨日の彼は瞬という名前である事。
あたしの一つ年下の25歳である事。
あの店のNO.1ホストである事。

なんだ。

NO・1って・・・どうりで何か色々スムーズに話進めるわけだ。でも見る目は外れる事もあったって事だね。

だってあたしは普通のOLで、お金持ってるわけでもなければ、無理してお金作ってホストクラブに通うわけでもないから。だから また。 はないの。

そう苦笑した後何故だかとても虚しい気持ちに襲われた。

彼とは、瞬とはそんな出会いだった。

それから1週間ほどはあたしからは勿論、彼からの連絡はなかった。正直携帯のアドレス帳を開かないと、存在さえ夢だったかのように彼はあたしの頭から出て行きかけていた。

更に1週間くらい過ぎて、彼からのメールが届く。

彼が珍しくオフが取れたらしく食事でもどうかとの誘いだ。

行く理由もないし、会う必要もない。

というかそもそも客になるつもりもないので連絡を取り合う必要もない。

あたしにとっても彼にとっても何の利点もないわけで、特に彼は恐らくあたしよりは倍は忙しいはずで、店に来るか来ないかもほとんど当てにならないようなあたしの機嫌とりなどするのは無駄に等しい。

まあ彼からすればこっちの考えなど知る由もないから仕方のない事なのかもしれない。

きちんと話してあげた方が彼の為になるだろう。

頑張っているであろう彼の時間を割くなんて。
そんな罪悪感だけが何故か心にあった。

その晩、あたしは彼の誘いに乗りきちんと話をしようと思った。
何度コミュニケーションしてもどう切り出していかが解らなくて、結
局正直に思ったままを話そうと決めて待ち合わせ場所に向かう。

「玲！こっちこっち。」

耳のどこかで彼の声を覚えていたみたいだ。
呼ばれたのは2度目で、呼び捨てにされたのは今が初めて。
でも少しも嫌じゃない自分が居て理解できなかった。

さあ言おう、何度タイミングを計ったのか。
結局何も言えずにその日は終わってしまった。

次こそは、次こそは。

そう思って幾日も経っていった、その間彼とは連絡も取り合っていない、でもあたしから連絡をする事はしなかった。
もしかしたら無意識の抵抗だったのかもしれない。
彼の役には立たないんだから期待はさせちゃいけない。
あたしの為にはならないんだからのめり込んではいけない。
そう思いつつもどうしても大事な事を切り出せずに時が過ぎて行っ

た。

そうして瞬と出会った日から１ヶ月ほどした春の初め。

いつの間にかあたし達は付き合い始めてた。

店にだって行ってないし瞬にはどんなメリットもないだろう。

だから最初彼から付き合つてと言われた時は断つたのだ。

でも３度目に言われた時にもう意地を張るのも馬鹿らしく思えた。

いつの間にかあたしは彼を好きになっていて、例えばこの関係がこれからどう変わっても、彼の中に嘘があつたとしてもそれも受け止めようと。

彼がそうだと言つなら信じてみればいいと。

そうしてあたし達は付き合い始めたのだ。

あれから役半年足らず。

あつという間だったけど、何だか長いようで短い。

それでもお互いもう何年も一緒にいるような、かと思えば昨日出会

ったばかりのような不思議な間隔が残っている。

あたしは当時と今はあまり変わっていないとは思っけど、瞬は日を増すことに変わっているような気がする。

そつやキモチと言えば可愛らしく聞こえるけど、瞬のそれは嫉妬や独占欲そつちに近い。

言葉にこそ出さないが、態度や表情に出るのですぐに解ってしまう。それについてあたしはあしらったりもするけど、本当に時々数えるくらいではあるけど、彼が怖くなる 때가 あってその時だけは、態と嫉妬に気付かないフリをしてしまう事もある。

「玲、俺今日同伴だから少し早く出かけるね。」

「そう、頑張つてね。気をつけて行ってらっしゃい。」

瞬はいつからかこんな風に毎日報告の電話をしてくれる。

あたしが不安にならないようにとか思ってくれているのかもしれない。

だからあたしも気持ちよく返事を返す。

「なあ、お前は俺の事どう思ってたの？」

突然瞬の声色が低くなり真剣な話をする時の口調になった。

「どう・・・したの？急に。」

「いや、なんでもない。じゃあ行つて来る。店終わったら寄るから。」

「うん・・・わかった。待ってるね。」

電話を切つた後また思い出に耽つてみたけど、瞬の様子が引つかかつて胸騒ぎが晴れる事はなかった。

AM2:00

瞬が部屋に来た。

最近仕事が終わるのも早いし、お酒も全然飲んでない日と飲みすぎる日とばらつきが激しい。

ちよつと心配だけど瞬も考えがあつてそうしてるんだろう。

仕事の事よく知りもしないあたしがいちいち口を出そうとは思わなかった。

「おかえり。疲れてない？」

「うん。最近早く上がらせてもらってるしそんなに疲れないよ。」

「え？どうしてそんな事してるの？お客さん寂しがるんじゃない？」

意外な瞬の言葉に思わず聞くと彼の笑顔が消えた。

「なんでって、少しでも玲に会いたいからだよ。」

さも当然のように答える彼は絶句したあたしに続ける。

「何？まさか玲はあんま会いたくないとか？」

「そうじゃないよ。けど仕事なんだしさ・・・それにお客さんだつてきつと出来る限り瞬に会いたいつて思ってると思うよ。」

「俺の客は玲に俺を盗られたとか思うのかね？」

「え・・・・・・・・・・？」

瞬は答えにならないような答えを言い放つと自信たっぷりの皮肉な笑顔を浮かべる。

ソファに少し乱暴に座り煙草に火をつけた。

ふーっと長い息と共に出てきた紫煙は、天井まで昇る事はなくしばらく霞のように瞬を取り囲んでいる。
それを見ていると何だか彼がとても遠くに行きそうで、言いようのない切なさ痛みが込み上げてきた。
今のあたしは自分でもどんな表情かわかる。
それに気付いたのかそうでないのか、瞬はいつものように優しく微笑んで自分の座るすぐ横をぽんぽんと叩く。

「おいで。」

その一言であたしは魔法にかかる。

いいえ、きつと。

出会ったあの夜からずっと、あたしは彼の魔法にかかっているのだ。

「玲。仕事やめてずっと側にいろよ。」

あたしは彼に正面から抱きついたまま彼の言葉を反芻する。

彼も左手は煙草を持ち、右腕であたしの腰を支えながら背中をソファに預けていた。

凄くゆったりした時間の中での今の言葉はきつと、目を覚まさせるには十分のはずだったけど、どこか不思議な程冷静な二人があつて、まるで二人ともがその先は決まっている事を知っているみたいに言葉を紡ぐ為の“間”だけを計っているみたい、そんな空気が流れている。

「うん。」

深く考えずに返事をした。

彼の魔法にかかったあたしには考える必要もない。

断る理由もない。

それでも何かとても大事な事をあたしは今でも言えずに、彼の心を窺って“その時”が来る事も知らずに居た。

けれど時は少しずつでも確実に訪れてきているのだ。

あの日以来あたしは職場にも退職届を出し、部屋を引き払って瞬のマンションに住むようになった。

もし誰かがあたしの出入りしてる所を見たら、とかそんな事も少しは考えたけど、あたし自身一緒に居れる事は嬉しいし、何より瞬がそれを望むならその通りにしたいと純粹に思ったからだ。

少し前のあたしなら彼の為にならないとか言ってたかもしれないけど、この時分既にそういう事ももう気にも留めなくなっていたかもしれない。

それからしばらくすると瞬は店を休みがちになっていった。

中には理不尽な客もいるとか、無理難題ばかりでしんどいとか色々理由をつけてはさぼるようになってしまったのだ。

そんな日が続き、彼の誕生日も過ぎて少し経ったある日、ついにその時は訪れた。

ここ何日か降り続いてた雨が止み、秋だというのにも関わらずまるで季節が逆戻りしたみたいに暑い日だった。

久し振りの暑さのせいだったのかそれとも、他に原因があったのか。少しずつ着実に積み上げてきた積み木はバランスを失えば崩壊するのはほんの一瞬で事足りる。

お互いに苛々としていた気分で些細な事が口論にまで発展した。

彼の真剣な、怒気を含んだ瞳が目の前にある。

あたしはその視線から逃れられそうにもない。

前には瞬の冷たく燃える眼光、後ろには硬くひんやりとした壁。

何故こんなにいつもより、彼の顔がはつきりと見えてるんだろう。

ああ。あなたが。

あたしの前髪を鷲掴みにして痛いぐらいに強く壁に押し付けているからだね。

どうして？耳も何だかいつもより聞こえてるみたいよ。

まるで今までのあなたの言葉は夢の中で囁いてたみたいに、壁に押し付けられた衝撃で現実に戻ってきたかと思える程しつかりとじわじわとあなたの声が頭にまで響く。

こんな状況にも関わらずあたしは、瞬と出会った以来一番の愛しさに襲われてた。
体の距離だけじゃなくて、心が触れそうくらい近くなった気がするから。

「お前が何を考えてるのかわかんねえよ。いつだって俺の言う事に笑って返事して……我儘だって言わねえ。」

僅かな沈黙を破ったあなたに笑みが零れた。

「笑ってんじゃねえよ。」

掴まれたままの髪と押し付けられた背中に再び衝撃が走る。
そうこれは現実。
やっとあたしはありのままのあなたと出会えたのね。
与えられた痛みがそれを解らせてくれた。

「あたしは、瞬が好きだから何でもしてあげたいし、我儘も言わない。だから……瞬の為になるなら別れた方がいいって言うっ

たのよ・・・・・・・・。。」

別れる、そうさっきあたしが言わなければ、きっとこんな愛しいあなたには出会わなかった。

あの一言が二人の距離を、体も心も、一つにしてくれたのよ。

「意味がわかんねえ。」

「あたしはね。瞬が幸せなら離れてても平気。側に居なくても笑ってるならいいから。」

あたしがそう言つと瞬は掴んでいた髪の毛を離し、煙草に火をつけた。

眩しい日差しに照らされた部屋が紫煙で溢れていく。

それをゆっくりと見ながら、座り込んだ彼の背中に寄り添う。

「玲。」

名前を呼んで煙草を灰皿に押し付けた。
次の瞬間耳元で囁かれた言葉にまた笑みが零れそうになる。

「俺は離れているのは無理だ。側に居てくれるなら、死んでもいいよ。」

穏やかに目を細めたあなたを愛している。

あたしの少し汗ばんだ首をゆっくりと、でも確実に力を込めていく行為。

出会った頃の記憶が長い刹那に駆け巡る。
あの人たちは誰なんだろう。
あたしのようであたしじゃない。
あなたのようにあなたじゃない。
今が本物なの。

愛も行為も言葉も痛みも瞳も、あたしもあなたも。

「スグニオレモイクカラネ」

声の出せないあたしはまた、一つ笑顔を浮かべる。

部屋には未だ白い靄が立ち込めたままだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1006i/>

紫煙に消えた

2011年1月15日14時56分発行